

The plural structure of Japanese myth – a viewpoint for decrypting “Kojiki” – (2)

ISAKA Seishi

Keywords: Japanese myth, “Kojiki”, Himuka, Emperor Jinmu, Shintoism

Abstract

Japanese mythology in the text of “Kojiki” contains Himuka Myth after Izumo Myth. Himuka is the birthplace of Amaterasu (goddess of sun) and further the descending place of Amaterasu’s grandson, Ninigi. Hence, Himuka became the holy place for the imperial family. Ninigi married the daughter of the mountain god and Ninigi’s descendants married daughters of the sea god. Therefore, the imperial family obtained the natural force of the mountain and the sea by blood relations.

The first Emperor Jinmu migrated from Himuka toward the east and conquered the area of Yamato with several influential clans. Emperor Jinmu married the daughter of Miwayama’s god Omononushi. The regal power of Yamato was originally realized by the unity between Emperor Jinmu and Miwa clan. Therefore, the imperial family did not consist of a singular descendant line, but comprised of plural blood relations. Thus, it can be said that the Japanese myth is composed of plural genealogies.

State Shinto controlled Japanese people by the totalitarianized Emperor system from Meiji era to World War II. Shintoism distorted the Japanese myth as a singular unbroken line of Emperor and concealed plural blood relations in the imperial family. However, Shintoism must be refuted by the plural structure of the Japanese myth “Kojiki.”

日本神話の多元的構造

―『古事記』解説への視座―（下）

伊坂青司

（上）の目次

はじめに

I 神話の成り立ちと日本の神話

II 神代神話の解説

II-1 高天原の原初の神々

II-2 伊邪那岐命と伊邪那美命

II-3 天照大神と須佐之男命

II-4 出雲神話

II-5 日向神話

「出雲神話」に続くのが「日向神話」である。このような配置順序は、日向⁽¹⁾の地に天孫が降臨するの⁽¹⁾に先立つ

て、葦原中国に強大な出雲国がすでに存在していたことを示している。そして天つ神が出雲国を平定した後、いよいよ天孫が筑紫（九州）の日向の地に降臨することになるのである。そこで日向を舞台に展開される「日向神話」について、引き続き日本神話の多元的構造という視点から、主に『古事記』に即して見てゆくことにしよう。その日向神話は、高天原から葦原中国の高千穂峰へ邇邇芸命が降臨するいわゆる天孫降臨の物語から始まって、邇邇芸命の子孫が日向の地を舞台に繰り広げる物語として展開されることになる。

邇邇芸命の天孫降臨

天照大神と高木神（高御産巢日神）は「葦原中国を完全に平定し終わった」として、天照大神の長男である天忍穗耳命おしほみみのみことを葦原中国の統治のために天降りさせようとした。ところが天忍穗耳命は自ら降ることなく、高木神の娘との間に生まれた天津日子番能邇邇芸命あまつひこはのくににぎのみこと（『日本書紀』では天津彦火瓊瓊杵尊あまつひこはのくににぎのみこと）以下、邇邇芸命とよあしはらのみすほのくにを自分の代わりに、葦原中国すなわち豊葦原水穗国に天降らせることになった。

邇邇芸命が高天原から天降りしようとしたところ、猿田毘古神さるたびこのかみが高天原からの分岐点にいて、葦原中国への先導役として迎えに来たという。この猿田毘古神の正体は、帰るべきところが『日本書紀』で「伊勢の五十鈴川の川上」とされていることから、伊勢の「国つ神」であることが分かる。伊勢の五十鈴川の川上（3）は、天照大神が後に鎮座することになる地であることから、猿田毘古神はそれに先立って伊勢国に土着していたことになる。記紀神話は、天照大神が五十鈴川に降り立つという物語によって、猿田毘古神の伊勢国に天照大神を祀る伊勢神宮が創建された由来を明らかにしている。

さらに邇邇芸命が天降るにあたって、天照大神は五人の伴緒ともをを随伴させたとされている。その中でも天児屋命あめのこやねのみことは、大和朝廷の祭祀を司る氏族である中臣（藤原）氏（4）の祖神とされ、また布刀玉命ふたたまのみことはやはり同じく祭祀を司る忌部氏いんべの祖神とされる。前に見たようにこれら二神は、天岩屋あめのいわやから天照大神を鏡で誘い出すという重要な役割を果たした。もう一人の天宇受売命あめのうずめのみこと（5）は天岩屋に隠れた天照大神を誘い出す踊りを舞った巫女である。大和朝廷で祭祀を司る氏族や巫女の祖神が天孫降臨の随伴者とされていることは、大和朝廷におけるそれらの役割の大きさを示している。

邇邇芸命の降臨にあたって天照大神は、八尺やさかの勾玉まがたまと八尺やの鏡かみ、そして草那芸くさなぎ之大刀のたちを持たせたとされる。このうち勾玉と鏡は天岩屋に隠れた天照大神を誘い出すために作られたものであり、また大刀は須佐之男命から天照大神に献上されたものである。これらがいわゆる「三種の神器」（6）とされてきたのは、こうした神話的フィクションに基づいている。これら三種の神器は、現在に至るまで天皇に継承されてきた物神となっている。

これら三種の神器には、それぞれに歴史的背景がある。勾玉（7）は古く縄文時代以来、糸魚川で取れた翡翠を最高の素材として、独特の形に加工されて列島内に拡散し、呪術的力を持つ宝玉として崇められてきた。銅鏡は中国皇帝から下賜された舶載鏡やそれを模した国産の仿製鏡ほうせいきようとして、特に北部九州の弥生遺跡の墳墓から発見されている。（8）このように銅鏡は弥生時代から古墳時代にかけて、王の威信財と見なされてきた。そして大刀は王権の軍事的力を示すものとされてきた。これら三種の宝物は、弥生時代の先進地域である北部九州の墳墓（9）や、また古墳時代のヤマト王権の支配を象徴する前方後円墳の棺の中にセットで副葬されている。こうした王権の象徴としての三種セットが、天照大神から邇邇芸命に与えられて天皇氏族に継承された「三種の神器」として神聖視される

ようになったと考えることができる。

三種の神器の中でも特に鏡について、天照大神は「私の御魂みたまとして祀り仕えなさい」と邇邇芸命に告げたとされている。それでは鏡への天照大神のこうした強い思い入れには、どのような意味が込められているのであろうか。それは天照大神からすれば、天岩屋から誘い出される時に「貴い顔」が鏡に映され、そのことによって初めて自分が天照大神であることを自己認識したということになる。したがって八尺の鏡はたんに顔を映すだけの反射板にとどまらず、まさに天照大神の魂として神格化されたという意味を帯びている。天照大神はその鏡を祀ることを思おも金神いかなのかみに命じて、思金神と邇邇芸命は「伊須受能宮いすのみや」すなわち五十鈴川に面して建つ伊勢の皇太神宮を「拝み祭った」とされている。この場面ですでに、後に天照大神が五十鈴川に降り立ち、伊勢神宮に八尺の鏡（10）が奉納されることが予示されている。

ところで邇邇芸命の天降りに際して、その先頭に立ったのが武装した天忍日命あめのおしひのみこと（大伴氏の祖神）と天津久米命あまつくめのみこと（久米氏の祖神）とされる。ここに、後にヤマト王権の親衛隊ともいえるべき役割を担うことになる氏族、すなわち大伴氏と久米氏の存在が示されている。こうしていよいよ邇邇芸命一行は、高天原から「筑紫つくしの日向ひかの高千穂たかちほの聖なる峰」に天降ることになる。高千穂峰に降り立った邇邇芸命は、その山頂から北で「韓国からくにに向き合い」、南で「笠紗かささの岬（11）」に通じ、東に「朝日」が射し、西に「夕日の照り輝く」良い地とした。そして邇邇芸命は高千穂の大地に柱を太く立て、千木を高く上げた「宮殿」に住んだとされる。こうして高千穂は天孫降臨の地として、また後に神倭伊波礼毘古命かむやまといわれひこのみこと（『日本書紀』では神日本磐余彦天皇かむやまといわれひこのすめらみこと）すなわち神武天皇が東方のヤマトに向かった出発点として、大和朝廷にとつての聖地となるのである。

ところで、なぜ天孫降臨の地はすでに平定した出雲国ではなく、そこから遠く離れた日向の高千穂でなければならなかったのだろうか。むしろ、後に神武天皇が東遷することになるヤマトの畝傍山うねびやまやヤマト王権の根拠地になる三輪山の方が、神話的フィクションとして相応しかったのではないだろうか。とはいえ、邇邇芸命が日向の高千穂峰に降臨したという物語は、天孫族の祖神である天照大神の誕生の地が筑紫の日向であるという物語から連動している。その意味で高千穂峰は、その筑紫の日向に聳える聖なる霊峰として、天照大神の孫にあたる邇邇芸命が降臨するという神話的フィクションに相応しかったといえよう。しかも後述するように高千穂峰は、天孫族の根拠地と想定される高千穂（現・高千穂町）から南方に望む霊峰なのである。

邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の物語

ところで邇邇芸命は高千穂峰から南に向かい、物語の舞台は海を望む薩摩半島の笠紗の岬に転じることになる。邇邇芸命はこの地で美しい乙女このはめの木花之佐久夜毘売さくやひめ⁽¹²⁾と出会い、一目ぼれして求婚する。結婚の許しを得るため、邇邇芸命は毘売の父親の大山津見神おおやまつみのかみに使者を遣わしたところ、喜んだ大山津見神は姉の石長比売いわながひめをも添えて差し出してきた。それは天孫族の寿命が堅固に続くことを願ったことであつたが、しかし邇邇芸命は石長比売が醜かったので送り返し、桜の花のように美しい木花之佐久夜毘売だけを手元に置き、一夜の契りを交わした。その後、木花之佐久夜毘売がやって来た時には、すでに身ごもって出産間近だという。その子がはたして一夜の契りだけで身ごもった我が子なのか、邇邇芸命は疑った。その疑念を晴らすために、木花之佐久夜毘売は「天つ神の御子であれば無事に生まれるでしょう」と、自ら作った産屋に入って火を放つことになる。その火中で三人の子

が無事に生まれて、順に火照命、火須勢理命、火遠理命という。

邇邇芸命と木花之佐久夜毘売のこうした物語は、九州南端に近い笠沙の岬の地に遺跡があるわけでもなく、神話的フィクションと考えられる。むしろ木花之佐久夜毘売は父親が山の神の大山津見神であり、また火中で出産したという物語からして、そこには木花之佐久夜毘売が伝承されている桜島の火山とのつながりが示唆されている。大和朝廷にとつて桜島周辺の南九州は、抵抗勢力である熊襲の支配が及んでいない、しかも薩摩隼人の帰順した薩摩国として重要な版図であった。さらに南九州は海にも開かれていることから、九州一帯の海を活動の舞台にする海人族が天孫族と深く関わり、その祖神である綿津見神が重要な役割を演じる地域でもある。こうして邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の子供のうち長男の火照命と三男の火遠理命は、それぞれ南九州の海と山に関わる物語を展開することになるのである。

天孫族と海人族の混血

火照命と火遠理命の活動の場と想定される南九州は、海と山の交差する地域である。火照命は海佐知毘古として海で魚を獲り、火遠理命は山佐知毘古として山で狩猟をしていたとされる。そこで弟の火遠理命は、兄に猟具の交換を提案して釣り針を手に入れたものの、その釣り針を海でなくしてしまう。兄から釣り針の返還を執拗に求められ、困り果てているところに塩椎神（潮流を司る神）が現れる。事情を話すと塩椎神は籠の小船を作って、火遠理命を海の神である綿津見神の宮へと送り出してくれた。着いたところが塩椎神の指示したとおり、魚鱗のようにびっしりと並び建つ綿津見神の宮殿であった。火遠理命が門の近くにある井のほとりの香木の上にいたと

ころ、綿津見神の娘の豊玉毘売とよたまひめが、その侍女の計らいで火遠理命を見初めることになる。そして綿津見神も火遠理命を天孫と認めて歓待し、娘と結婚させたという。

ところが火遠理命は三年経ったところで海の宮殿に來た目的を思い出して溜息をつき、その訳を問う綿津見神に事の仔細を語ったところ、鯛の喉に刺さっている釣り針を見つけてくれた。釣り針を手にした火遠理命は、一尋ひろワニ(14)（サメ）に乗って戻り、釣り針を自分を苦しめた兄に返すことができた。その時に綿津見神から教えられたように後ろ手で呪文を唱えたところ、その言葉どおり火照命は貧しくなった。そしてそれを恨んだ火照命が戦いを仕掛けてきたので、火遠理命は綿津見神からもらい受けた潮の満ちる玉で溺れさせ、今度は火照命が憐れみを乞うてきたので、潮の干る玉で助けてやった。こうして火照命は「私は今後、あなたを昼も夜も守る者となってお仕えます」と言って、火遠理命に服従することになった。それで「火照命の子孫である隼人はやと」は、溺れるような舞（隼人舞）をして朝廷に仕えているとされるのである。

このように兄である火照命が隼人族の祖とされていることは、次のことを示している。すなわち、邇邇芸命直系の子である火遠理命に対して、隼人族の祖である火照命を同母の兄であるかのような兄弟の物語に大和朝廷が仕立てたということである。その歴史的背景として、大和朝廷が南九州に日向国を七世紀中頃に設置した後、それまで抵抗していた薩摩隼人を平定して、八世紀初めには薩摩国を設置したという史実がある。邇邇芸命が木花之佐久夜毘売と結婚したのが薩摩半島の笠沙の岬であったというのも、そこがすでに大和朝廷によって平定された薩摩国に帰属していたからである。さらに大和朝廷は、いまだ強く抵抗していた大隅隼人を平定して、大隅を大和に統合しようとしていた。そのことは裏返せば、兄のように威張る憎き大隅隼人は、大和朝廷にとって報復

と征服の対象でもあったことを示している。そして『古事記』完成の翌年、七一三年には大和朝廷は大隅隼人も平定して、大隅国を版図に組み入れたのである。こうした歴史的動向が、火照命と火遠理命の物語に投影されていると見ることが出来る。

ところで、豊玉毘売は宮殿を去った火遠理命を追いかけて来たが、その時すでに妊娠して出産間近になっていた。そこで鵜の羽根で産屋を葺き終わらないうちに出産が切迫し、豊玉毘売は火遠理命に「本来の姿になって産みます。どうか私を見ないでください。」と告げて産屋に入った。その言葉を不思議に思った火遠理命は密かに覗き見ると、その出産する姿がくねくねと腹這う「大きなワニ〔サメ〕」だったために驚いて逃げた。見られた豊玉毘売は恥ずかしく思い、子を置いて海の国に帰ってしまった。その子の名前は鵜葺草葺不合命（15）で、その養育のために遣わされた豊玉毘売の妹・玉依毘売（たまよりひめ）を後に娶ることになる。そして産まれた子が五瀬命（いつせのみこと）とす。四兄弟で、その末の弟が神倭伊波礼毘古命（かむやマトイワレひこのみこと）、すなわち後の神武天皇であるとされるのである。

以上、邇邇芸命が筑紫の日向にある高千穂峰に天降ってから神倭伊波礼毘古命が誕生するまでの物語を見てきた。舞台が南九州の広い意味での日向一帯であることから、その物語は「日向神話」と名付けられ、邇邇芸命から鵜葺草葺不合命は「日向三代」とも呼ばれる。この神話は記紀の中で「出雲神話」の次に配され、邇邇芸命に始まる天孫族の日向における系譜を伝えるものである。神倭伊波礼毘古命から系譜を逆に遡れば、その父親の鵜葺草葺不合命が火遠理命の子であり、火遠理命の父親が邇邇芸命であり、そして邇邇芸命の祖母が天照大神である。そのことから、神倭伊波礼毘古命は天照大神の五世孫ということになる。その神倭伊波礼毘古命は、鵜葺草葺不合命と玉依毘売の子であり、その鵜葺草葺不合命が火遠理命と豊玉毘売の子であることから、母方を

通して綿津見神の血を受け継いでいる。こうして神倭伊波礼毘古命は、天つ神の天照大神とそれとは異質な国つ神の綿津見神の血筋を合わせ持つハイブリッドということになる。

神倭伊波礼毘古命が海のワニ（サメ）の姿で出産した豊玉毘売の妹である玉依毘売の子であるとなると、神倭伊波礼毘古命すなわち初代天皇の神武天皇にはワニの血が流れていることになる。それではなぜこのような驚くべき神話的フィクションがあえて必要だったのだろうか。その秘密の鍵は、天孫族が天照大神からの血筋だけではなく、綿津見神の血筋を合わせ持つという物語によって、海の力を血統のうちに取り込んだことを示すことにあったと言えよう。歴史的に見て、綿津見神を祖神とする海人族の中でもワニ（サメ）を動物トータルとする和邇氏^{（16）}は、天皇氏族と姻戚関係によってつながっていた。海人族はもともと航海と漁労に長けた海洋集団で、朝鮮半島南部との交易など、弥生時代から北部九州を中心に活動していた。海人族の中でも、博多湾を根拠地とする海部氏^{（17）}や安曇氏と並んで、和邇氏は北部九州から山陰地方沿岸の出雲を経てヤマトに入ったと想定される。そのことは、和邇氏がヤマトに定住して土着豪族となり、その痕跡を「和邇古墳群」^{（18）}に留めていることから知らることができる。

後に九州からヤマトに入ってきた天孫族は、先住の土着勢力である和邇氏と姻戚関係を結ぶことによって、綿津見神を祖神とする海人族の力を血統のうちに内在化させた。実際に『古事記』には、第九代開化天皇の妃（意祁都比売命^{（19）}）が和邇氏の血筋とされ、また開化天皇の第三皇子の日子坐王^{（20）}は母系で和邇氏の血筋を引くことが記されている。このように天皇氏族にとって、和邇氏との姻戚関係は王権の強化と拡大に必要不可欠であった。実際にヤマト王権は、南九州まで活動範囲としていたと想定される和邇氏との姻戚関係を後ろ盾にして、薩摩と大

隅にまで版図を拡大していったのである。

以上のように日向神話には、天孫族と山津見神の娘（木花之佐久夜毘売）との混血、そして綿津見神の娘（豊玉毘売と玉依毘売）との混血という神話物語によって、天皇氏族に内在化された多元的な血縁関係が示されているのである。

Ⅱ-6 神武天皇の東遷物語

日向神話に続くのが神倭伊波礼毘古命のその後、すなわち神武東遷の物語である。その物語は、神倭伊波礼毘古命の初代天皇としての即位、すなわち神武天皇の誕生へと連続する。神武天皇については『古事記』の中巻冒頭に配されているが、神武東遷の物語が神話性を帯びていることから、本節では神代神話の連続線上で考察することにした。そこで神倭伊波礼毘古命が筑紫の日向から東に向けて出発し、ついにはヤマトに至って畝火の白禰原宮（以下、『日本書紀』の「檀原宮」の表記に従う）で神武天皇として即位するまでの物語を辿ることにする。

神倭伊波礼毘古命は、日向の高千穂宮で長兄の五瀬命と相談して、「天の下あめしたまつりもとの政」を行うに相応しい地を求め「東の方」に向かったとされる。ということは、南九州で生まれた神倭伊波礼毘古命らは、邇邇芸命が降臨した高千穂峰という天孫族の聖地ともいべき原点に立ち戻っていたことになる。その筑紫の日向から見て、「東の方」は彼らにとっていまだ未知の新天地である。東方に向かうことになった動機は天下の政治に相応しい地を求めることにあったのであるから、それは軍事力による征服という意味での「東征」ではなく、途中で抵抗勢力

との戦いに遭遇することになるとはいえ、むしろ「東遷」⁽¹⁹⁾と呼ぶ方が相応しい。『日本書紀』では、塩土老翁^{しおつちのわじ}の話として「東の方」に「良い土地」があり、そこに「天磐船^{あまのいわふね}に乗って飛び降った者がある」とされ、その者が饒速日命^{はやひのみこと}で物部氏の祖神であることが明かされる。⁽²⁰⁾したがって「東の方」の地ヤマトには、物部氏が天孫族に先立って定住していたことが予示されているのである。

神倭伊波礼毘古命の東遷経緯

神倭伊波礼毘古一行が出発したとされる「高千穂宮」^{たかちほのみや}がどこなのか、二つの可能性が考えられる。その一つは、『古事記』の日向神話に従えば高千穂峰ということになるが、しかしこの高千穂峰に宮殿といった遺跡もなく、神話的フィクションである可能性が高い。そこでもう一つの可能性は、高千穂神社（宮崎県西臼杵郡高千穂町）に伝承される高千穂宮である。高千穂神社の主祭神は高千穂皇神^{すかがみ}で、日向三代とその配偶者であるとされる。この高千穂神社には、日本神話にまつわる神楽の伝統や、またその周辺に位置する天岩戸^{あまのいわと}や天安河原^{あまのやすかわら}の伝承、そして縄文時代から古墳時代に至る遺跡があることから、この高千穂を高千穂宮のあった地と想定したい。⁽²¹⁾ そうだとすると、もともと天孫族の根拠地であったこの高千穂が、南方に聳える聖なる霊峰としての高千穂峰に神話的に転移されたものと考えることができる。

この高千穂を流れる五ヶ瀬川^{ごかせがわ}が、日向灘へと注いでいる。その川の名称が五瀬命^{いつせのみこと}の名に由来するとする説もあり、その説は高千穂が神倭伊波礼毘古一行の出発点になったことの傍証になろう。そうだとすると、「日向から出発」した神倭伊波礼毘古一行は、五ヶ瀬川を下って日向灘に出たことになる。そして海路で北上して、『古事

記」によれば「筑紫の地」へと向かうことになる。まずは豊国の宇沙（現・大分県宇佐）に立ち寄り、そこで宇沙都比古（22）と宇沙都比売（22）に歓待されたとされる。そして筑前岡田宮（現・大分県岡田）に一年、安芸国（現・広島県）の多祁理宮（23）に七年、さらに吉備（現・岡山県）の高島宮（24）に八年滞在したとされる。途中の安芸国や吉備国までは抵抗勢力に会うこともなく滞在していることからすると、瀬戸内沿岸の地域では神倭伊波礼毘古一行は地元の豪族によって友好的に対応されたことを示している。

その後、浪速渡（現・難波）から白肩津（現・東大阪市日下）に入ったところで、那賀須泥毘古（25）の率いる軍に迎え撃ちられる。そして五瀬命が矢に当たって負傷してしまう。そこで「日神（天照大神）の子孫として日に向かって戦ったこと」がよくなかったとして、「日を背に受けて」退くことになる。そして紀伊国へと迂回し、男水門（26）まで南下したところで、五瀬命は深手の傷が原因となって死んでしまう。

さらにそこから紀伊半島を回って、熊野まで来たところで船を降り、陸路で熊野村に入ることになる。そこに突然現れた大きな熊の毒氣に当てられて、神倭伊波礼毘古命も兵士たちも倒れてしまう。さらにそこに熊野に住む高倉下（27）が現れ、献上した大刀の威力によって全員が正気を取り戻した。その大刀は、高倉下の見た夢の説明によれば、天照大神と高木神の命によって建御雷神が降ろしてくれた布都御魂（28）という。ここに登場する高倉下は、『旧事本紀』によれば物部氏の祖神である饒速日命の子だとされている。饒速日命は後で見えるように、神倭伊波礼毘古命に先立って生駒山麓に定住していたとされていて、熊野の高倉下に大刀が降ろされたという物語にはそうした背景がある。その大刀が後に、物部氏ゆかりの石上神宮に祀られる布都御魂になるのである。

さらに高木神によって遣わされた八咫鳥（29）の先導で、神倭伊波礼毘古一行は熊野から吉野河（30）の河口へ至ったと

される。熊野から吉野に至る深山幽谷の山岳ルートは、記紀成立の頃には大峰山を経て吉野山に至る険しい修験道の山岳霊場として知られていた。すでに飛鳥時代には役行者がそのルートを修験道の場として拓き、大和朝廷にもその情報は伝わっていたと考えられる。このルートが初めて足を踏み入れた神倭伊波礼毘古一行に踏破できるところの道でないことは、想像するに難くない。その意味で熊野から吉野に至る修験道のルートは、八咫鳥に導かれた神倭伊波礼毘古一行の厳しい山岳行軍として神話化するには、むしろ相応しかったと言えよう。実際の行軍は、熊野からの山岳ルートではなく、五瀬命の死んだとされる男水門から紀ノ川を遡上して吉野川河口に至る河川ルートが考えられる。

いずれにしても吉野川の河口に至って、神倭伊波礼毘古命は吉野の三人の国つ神に次々に迎えられることになる。この吉野は、大和朝廷にとって記憶されるべき地であった。というのも吉野は、天武天皇による壬申の乱挙兵の地であり、またその後も持統天皇が何度も行幸した地であったからである。しかも吉野は、大和朝廷にとって当時貴重とされた丹の原料となる辰砂の産地でもあった。⁽³⁰⁾

ところで、神倭伊波礼毘古命が吉野から宇陀（現・奈良県宇陀市）に入ろうとしたところ、そこには兄宇迦斯と弟宇迦斯の兄弟がいて、兄は神倭伊波礼毘古命を迎え撃とうと罫を仕掛けた。神倭伊波礼毘古命を出迎えた弟がそのことを告白し、道臣命（大伴氏の祖）と大久米命（久米氏の祖）は、仕掛けられた罫に兄本人を追い込んで殺してしまう。さらに宇陀から忍坂（現・奈良県桜井市忍阪）に入ったところ、凶悪な土雲が大家の中でのうなり声をあげていた。そこで弟宇迦斯は食事を与えると見せかけて、歌を合図に兵士たちが土雲を斬り殺した。また忍坂から西に入った磯城（三輪山西麓）の地では、兄師木と弟師木を討伐したという。

ここで活躍する道臣命は、『日本書紀』によれば、その功績により後に神武天皇によって橿原の「築坂邑」⁽³¹⁾に宅地を賜ったとされる。この道臣命の祖神の天忍日命は、邇邇芸命が高天原から高千穂峰に降臨した際に、弓矢と大刀で武装して先陣を切ったとされている。その天忍日命を祖神とする大伴氏は、大和朝廷で天皇の親衛隊的な軍事担当として認められてきた氏族である。しかも壬申の乱に際して、大伴吹負^{ふけい}は大海人皇子（後の天武天皇）軍の將軍として功績を挙げ、大伴氏の活躍は大和朝廷内で記憶に強く残っていたであろう。

ところで神倭伊波礼毘古が宇陀から忍坂、そして磯城へと土着勢力を平定していったルートは、奈良盆地の南東から三輪山の南麓を経て西麓へと至るもので、しかも三輪山西麓の磯城は、後にヤマト王権の拠点になる地域である。ここで注目したいのは、このルートには神武東遷に先立ってすでに土着勢力が定住しており、神武天皇軍が抵抗する先住土着勢力を平定したという物語である。すなわちこの物語によって、神倭伊波礼毘古命は橿原に至る前に、すでに土着勢力の定住していた奈良盆地の南東部から三輪山西麓を支配地域にしたことを示そうとしているのである。

さらに神倭伊波礼毘古命が西に向かって進軍していったところに、邇邇速日命^{にぎはひのひのみこと}（『日本書紀』では饒速日命）が現れ、「天つ神の御子の後を追って降りて来ました」と告げて、神倭伊波礼毘古命に仕えることになる。その邇邇速日命は、すでに那賀須泥毘古の妹の登美夜毘売^{とみやひめ}と結婚して、子供をもうけていたという。その那賀須泥毘古は、神倭伊波礼毘古一行が白肩津から生駒山へ進もうとしたところで迎え撃ち、五瀬命を矢で傷つけて死に至らしめた張本人である。

邇邇速日命と那賀須泥毘古の関係については、『日本書紀』でより詳しく次のように記述されている。天皇軍

は長髓彦^{ながすねひこ}を討つために戦いを重ねたが勝利できずにいたところ、金色の鵄^{とび}が天皇の弓の先にとまり、その光で長髓彦の軍勢は幻惑されて応戦できなくなった。そこで長髓彦が使いを送って言うには、饒速日命^{にぎはやひのみこと}がかつて天降つて、自分の妹を娶つて子^{うましま}（可美真手命^{でのみこと}）をもうけたので、その饒速日命に仕えてきたという。しかし長髓彦は、饒速日命の他に天つ神の子がいるとすれば、それは「偽者」ではないかと疑ったので、天皇は偽者ではない証拠として矢と鞆^{ゆき}を示した。それでも長髓彦がそれを認めずに抵抗したので、饒速日命は義父の長髓彦を殺害し、軍を率いて天皇に帰順することになったという。こうして天皇に忠誠心を尽くした饒速日命は「物部氏の祖先」だとされるのである。

そもそも歴史的に見て北部九州を拠点としていた物部氏は、天孫族に先立って畿内ヤマトへ移動してきたと考えられる。⁽³³⁾ そうだとすると、物部氏の祖神とされる饒速日命が神武東遷に先立って天磐船で降臨して、長髓彦と姻戚関係を結んでいたとする物語は、あながち神話的フィクションとは言えない。饒速日命が長髓彦を殺害して神武天皇に帰順したという物語には、物部氏がその軍事力によって、大伴氏とともに大和朝廷を支える中心的役割を担ってきたことが投影されているであろう。歴史的にヤマト王権が三輪山西麓を統治したのに伴って、物部氏もまた生駒山麓の河内から三輪山麓北西の布留^{ふる}地域に拠点を拡げ、初期ヤマト王権を軍事面から支える豪族になってゆく。このことは、三輪山北側に位置する石上神宮^{いそのかみじんぐう}が物部氏の系譜⁽³⁴⁾の祭祀する神宮であるだけではなく、大和朝廷の武器庫としての役割を担っていたこととも符合する。

神倭伊波礼毘古命は東遷の過程でさまざまな苦難を乗り越え、「荒ぶる国つ神」や「従わない者たち」を平定し、畝火^{うねひ}の白檮原宮^{かしはらのみく}（檀原宮）に入って神武天皇として即位したとされる。そのことによって、神武天皇が天皇

家の原点をなすことが示されるのである。それとともに、神武東遷物語の中に天皇を支えた氏族たちの功績が語られ、その氏族の祖神の名が明かされている。そのことは、諸氏族を統合した天皇氏族の正統性とともに、神武天皇に発するヤマト王権の多元的構造を示すものでもある。

それでは神武天皇が即位した橿原は、どのような地として描かれているのであろうか。奈良盆地西南部に位置する橿原は、「人々が穴に住む」未開の地で、「そこで山林を伐り開いて宮殿を造営」という『日本書紀』の記述からして、神武天皇が入った頃には奈良盆地の土着勢力の力がいまだ及んでいない地であったと理解することができる。その新天地に神武天皇は都を開いて、そこを真ん中にして「掩八紘而為宇」すなわち四方八方の世界を掩って家となそうとしたとされる。そして神武天皇は臣下に対する論功行賞として、道臣命には橿原周辺の築坂邑を、また大久日命には畝傍山の西に久日邑（くのひのむら）を与えたとされる。しかも橿原の西北に位置する河内には、すでに物部氏の祖神である饒速日命が拠点を構えていた。こうして神武天皇は橿原を拠点に、大伴氏と物部氏という二大氏族を支柱にして、ヤマト王権の原点を形成したのである。

ところで神武天皇は橿原宮で即位して、大久米命の推薦する美しい乙女を娶ったとされる。『古事記』によると、その乙女の名は多多良伊須氣余理比売（たたらいすけよりひめ）で、三輪山の大神主神が勢夜陀多良比売（せやだたらひめ）の美しさに心を奪われてできた娘であるとされている。その大神主神は、大神主神が出雲国を完成させるために三輪山に祀った「大三輪の神」である。すなわち、神武天皇が娶った乙女は出雲系の大神主神の娘であり、その多多良伊須氣余理比売は宮廷に参内して三人の男子をもうけたとされる。このことは、天皇氏族が大神主神を祖神とする大三輪氏の血筋をその系譜の中に取り込んだことを意味している。こうして、後に三輪山麓に確立されることになるヤマト王権は、

その成り立ちにおいて氏族連合としての多元的構造を示しているのである。

ところで神武天皇は、まだ日向にいたときに阿比良比売と結婚して、二人の男子をもうけていたという。神武天皇が崩御した後、長男の多芸志美美命は天皇の皇后である伊須気余理比売を娶ることになる。そして皇位継承を狙う多芸志美美命は、腹違いの三人の弟を殺害する企てを巡らす。それを察知した伊須気余理比売はその企みを三人の実子に歌で暗に知らせ、三男の神沼河耳命が腹違いの兄である多芸志美美命を殺害する。そしてこの神沼河耳命が皇位を継承して、第二代の綏靖天皇になったとされる。こうした血にまみれた皇位継承には、その後の天皇にも見られる皇位継承問題の深刻さが暗示されているのである。

『日本書紀』の神武天皇条の最後に、橿原宮で一三七歳で崩御したとされる天皇を「畝傍山うしろのすみのみさぎ東北陵に葬りまつた」とあることから、大和朝廷では神武天皇陵が橿原にあったと認識されていたことになる。しかしこの伝承に対応する天皇陵の位置は歴史的に確定されてはおらず、文久年間に幕末の尊王運動を背景にして、畝傍山の東北麓にあった塚「ミサンザイ」が紆余曲折を経て神武天皇陵に治定され、明治時代に整備される至った。また現在の橿原神宮も、もともとその遺跡が発掘されたわけではなく、あくまでも神武天皇の橿原宮と想定される位置に、明治天皇によって明治二三年に創建されたものである。

「神武東遷」物語の歴史的背景

ところで「神武東遷」物語はたして神話上のフィクションなのか、あるいはなんらかの史実が元になっているのだろうか。この問題は古くから論争的になってきたし、ヤマト王権の本質を考える場合に避けて通ること

ができない。記紀における神武東遷の物語からすると、神武天皇の出自は筑紫の日向にあり、その後ヤマトに移動して王権を確立したことになる。もしヤマト王権が最初から畿内大和に形成されていたのであれば、わざわざ日向神話と神武東遷の物語をフィクションとして創作する必要などなかったであろう。そうしてみると神武天皇の出自は、記紀にあるように筑紫の日向に求められよう。

それでは神武東遷の背景となる時代状況はどのようなものであったのだろうか。前述のように、神武東遷の出发点を高千穂に、またその時代を水田稲作の広がった弥生時代と想定してみよう。高千穂の北で接する北部九州は、考古学によって明らかにされつつある弥生遺跡群から、朝鮮半島南部地域から入ってきた水田稲作によって列島の先進地域であったことが分かる。水田稲作を基礎に環濠集落(国)が作られ、いくつもの国が北部九州に形成されていた。

またこの時期の北部九州は、朝鮮半島の帯方郡を介して中国の魏とつながる交流の前線地域でもあった。その当時の北部九州の状況を、われわれは中国側の史料によって間接的に知ることができる。魏の国の史料である『魏志』『倭人伝』は、北部九州の「倭国」の三世紀中頃にかけての状況について、あらまし次のように伝えている。倭国は男子を王として七・八〇年になるが、諸国が乱立し互いに攻撃し合って年を経てきた。そこで「邪馬台国」の「卑弥呼」を「倭の女王」として共立し、倭国の乱は収まったという。卑弥呼は、二三八年に魏の「天子」(皇帝)に使いを送って献上品を捧げた見返りとして「親魏倭王」の称号が与えられ、「銅鏡百枚」を含む品々が下賜された。⁽³⁸⁾しかし二四七年には卑弥呼は帯方郡に使節を派遣して、邪馬台国の南に接する狗奴国の男王が卑弥呼に敵対し、「相攻撃する」戦争状態にあることを、あえて報告している。⁽³⁹⁾

確かに『古事記』には邪馬台国の卑弥呼について、直接的には何も語られてはいない。⁽⁴⁰⁾ただし、『魏志』「倭人伝」の表記である「卑弥呼」が、当時の倭人による呼称「ヒミコ」に漢字を当てたものだとすると、そのヒミコは「日巫女」の意味ではなかったのだろうか。それは太陽神を祭祀する巫女を意味し、その巫女が仕える太陽神そのものが「天照大神」として神格化されたと考えることができる。こうして太陽神を祭祀する邪馬台国において、天照大神を主神とする神話の原形が形成されと想定することが可能である。このような太陽神への信仰は、邪馬台国だけに限定されるものではなく、少なくとも水田稲作が広がっていた北部九州の「倭国」に属する国々でも共有しえたであろう。そうだとすれば邪馬台国で形成された天照大神の神話は、「倭国」の有力氏族にとっても受容しうるものであったと考えることができる。

ところで『魏志』「倭人伝」によれば、卑弥呼が死んだと想定される二四八年の後に、男王が立つも倭国内でまた殺し合いになり、そこで卑弥呼の宗女である一三歳の台与（臺與）^{とよ}が立って国内が安定したという。しかし、台与からの朝貢の記事を最後に、倭国についての情報が途絶えてしまう。⁽⁴¹⁾その原因が、一つには二六五年の魏の滅亡にあるとしても、もう一つには、狗奴国からの攻撃がその後も続いて、邪馬台国は存亡の危機に陥ったことが考えられる。

「邪馬台国」の名が再び中国の史料に登場することはなく、倭国内ではその後、大きな異変が起きたと推定される。三世紀後半になってもなお、邪馬台国を含む北部九州の倭国は鉄剣で武装した狗奴国（熊襲）によって南から脅かされ、その難を避けて諸国の氏族が断続的に東へ移動したことが考えられる。邪馬台国に属する一族もまた、狗奴国による邪馬台国への攻撃を逃れて、狗奴国の支配する阿蘇山南西麓を回避して、阿蘇山東麓から

高千穂に拠点を移したと想定してみよう。そしてこの氏族が、自分たちを天照大神の子孫として、すなわち「天孫族」として自覚化していったと考えることができる。この天孫族は日向神話に見られるように、山津見神や綿津見神を祖神とする氏族との混血によつて、一氏族を超えた勢力を形作つてゆくのである。

さらに神武東遷の物語に見られるように、天孫族は東方に新天地を求めて、邪馬台国から引き継いだ「ヤマト」⁽⁴²⁾の名とともに、高千穂から畿内ヤマトへ移動したと考えることができる。その氏族のリーダー的人物が神倭伊波礼毘古命で、記紀における神武東遷と神武天皇の即位として記述されるのである。東遷の過程で天孫族は伴氏や物部氏などの有力氏族を糾合しつつ、またヤマトの先住氏族である和邇氏や大三輪氏をも統合してヤマト王権を形成することになる。物部氏は神武東遷に先立つて北部九州から瀬戸内海を経由して三世紀前半には河内に入り、その後天孫族が三世紀中頃から後半に日向からヤマトに入ってきたと想定することができる。その際天孫族による諸氏族統合のための観念装置が、天照大神を中心とする高天原神話であり、また天孫族の日向神話だったのである。

ヤマト王権を構成する有力氏族の中でも、三輪山西麓を根拠地とする大三輪氏は、もともと博多湾沿岸から出雲を経由し、ヤマトに入つて定住したと考えられる。⁽⁴³⁾大三輪氏の祖神は三輪山に祀られた大物主神とされることから、そこには大三輪氏と出雲との関係が示唆されている。⁽⁴⁴⁾最初は橿原に拠点を置いた天皇氏族は、三輪山方面へと勢力を拡大して先住の大三輪氏と融合してゆく。それは武力を伴ったものではなく、神武天皇と大物主神の娘との結婚に示されているように、婚姻関係によるものであった。この大三輪氏が拠点としていたのが三輪山西麓に位置する磯城で、その痕跡を留めているのが纏向遺跡^{まきむく}である。⁽⁴⁵⁾天皇氏族が三世紀後半にこの纏向に入り込

み、大三輪氏と連合したヤマト王権を確立して、纏向は初期ヤマト王権の王都になったと考えることができる。⁽⁴⁶⁾

吉野ケ里遺跡の六倍の規模にもなるこの王都には、宮殿跡と祭殿跡が確認され、初期ヤマト王権は統治機能と祭祀機能を併せ持っていたことが分かる。この纏向遺跡に隣接する箸墓古墳は、三世紀後半の築造と推定される最

初期の大型前方後円墳で、被葬者は倭迹迹日百襲姫命に治定されている。そうだとすると箸墓古墳の被葬者は、⁽⁴⁷⁾

纏向王都の女性祭祀者であつたと考えられる。『日本書紀』によれば、この倭迹迹日百襲姫命は大三輪氏の祖

神・大物主神の妻とされることから、箸墓古墳には大物主神を祖神とする大三輪氏の祭祀の痕跡を見ることができ⁽⁴⁸⁾る。こうして初期のヤマト王権は大三輪氏と天皇氏族の連合として、祭祀と政治が一体であつたと考えられる。

その後は、前方後円墳がヤマト王権の政治権力の象徴として、列島の版図に拡大してゆくことになる。

神武天皇の後に「初めて国を統治した天皇」とされる崇神天皇は、三輪山南西山麓の纏向に隣接する「師木水垣宮」⁽⁴⁹⁾を皇居としたとされる。この崇神天皇にも、疫病を治めるために大物主神を三輪山に祀るなど大三輪氏との関係が窺われる。こうして天皇氏族は、大三輪氏との連合を軸にしつつ、大伴氏や物部氏の軍勢力を背景に、

畿内ヤマトの和邇氏や葛城氏などの先住有力氏族をも統合して、ヤマト王権を拡大してゆくのである。

Ⅲ 日本神話と国家の関係

以上の記紀神話と神武天皇の物語は、たんに過去の伝承であるにとどまらず、そこには記紀編纂当時の大和朝廷のあり方が投影されてもいる。そこで記紀編纂当時の日本の国家としてのあり方を歴史的に振り返りつつ、日

本神話と国家の関係について考察することにした。そして日本神話が明治期から戦前に至る日本国家によってどのように扱われたのか、現代的な視点から批判的に問い直すことにする。

記紀神話と大和朝廷

記紀神話の編纂された時代に、日本国家はどのように認識されていたのであろうか。大和朝廷の内部文書的な性格の強い『古事記』では、当時の日本列島の版図全体が「大八島国」と呼ばれている。『魏志』『倭人伝』で使われていた中国側からの「倭」^{やまと}国の呼称は、主に北部九州の諸国の総称であったが、『古事記』ではヤマト王権の支配の及ぶ版図を指すようになる。それに対して『日本書紀』では、「倭」の表記が「日本」^{やまと}に変化している。そこには、対外的な正史としての性格を有する『日本書紀』だからこそ、日本国家としての自己主張が示されている。

それでは日本^{やまと}という名称はどのようにして成立したのであろうか。『隋書』（六三六年）「東夷倭国」の条に、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す」という文言を含む国書⁽³⁰⁾が遣隋使によつて渡され（六〇七年）、それを受け取った皇帝・煬帝が激怒したと伝えられる。蔑称のニュアンスを帯びた「倭」国を避けて「日出ずる処」と称したところに、中国に対する当時の大和朝廷の自覚のほどを感じ取ることができる。その後「日本」という国名が中国側の史料で最初に登場するのは『旧唐書』で、その「東夷伝」には「日本国は倭国の別種なり。……倭国自らその名の雅ならざるを悪^{にく}み、改めて日本となす」とある。それまで海外から呼ばれていた「倭国」を、大和朝廷の側から唐代の中国に対して「日本」⁽³¹⁾と改めたことが示されている。しかも大和朝廷が「日本国」

を「倭国」とは「別種」として区別したことは、天智朝まで用いられていた「倭国」を天武朝下で「日本国」に改称した、日本国家としての主体性を示している。

「日本国」への改称と相まって、それまでの名称であった「大王」^{（おわきみ）}が、天武天皇から「天皇」^{（すめらみこと）}の名称に改められた。それは、天武天皇の崩御（六八六年）により和風諡号が「天淳中原瀛真人天皇」^{（あめのぬなはらのおきまひとのすめらみこと）}とされたことに示されている。このように天武天皇から「天皇」が諡号として使われたことは、唐の第三代皇帝・高宗が六七四年に

「天皇」と称したことを無関係ではない。中国における「天皇」の呼称の起源は漢代にまで遡り、道教において天界の最高神が「天皇帝」と呼ばれていたことに発する。^{（82）}このようにもともと中国で使われた「天皇」を日本でも使用したことは、対外的に中国を意識したものであるとともに、宗教的な意味合いを込めたものでもあった。

このように天皇を頂点とする律令国家体制の確立期において、天皇の宗教的な權威づけが必要とされた。祭祀と政治の未分化な状態にあつて、政治とともに祭祀を司る天皇の權威が必要とされたのである。こうした祭政一致の天皇制の体制はその後、奈良時代から平安時代まで、すなわち武家政権の樹立前まで続くことになる。

天皇による祭政一致の体制を正当化し權威づけるためにも、神代の神々から神武天皇に至る系譜を跡付ける必要があつた。それは外来の「仏教」伝来以前の神々について、天地開闢から始まる神代神話の伝承を文書として編纂することであつた。それが天武天皇の勅命によって開始された記紀編纂という国家事業に他ならない。天武天皇によるこの勅命の意図が仏教の排除を伴ったものではなかったことは、大官大寺によって象徴される仏教保護政策によっても分かる。この勅命の意図するところは、日本固有の神話を前提として神武天皇から始まる天皇家の系譜を、対内的かつ対外的に「日本」^{（やまと）}国家の正統性として知らしめることであつた。

それでは大和朝廷では、「日本」国としての国土の版図はどのように認識されていたのであろうか。『古事記』では、北は北海道・東北地方の蝦夷えみし、南は九州の熊曾くまそ（『日本書紀』では熊襲くまそ）の住む地域が国の境界外とされていた。『古事記』の景行天皇条では、倭建命やまとたけるのみこと（小碓命おすのみこと）が、父である天皇の命令により熊曾建兄弟を討伐し、その後に引き続き「東方の十二か国の荒ぶる神」の討伐に向かったとされる。その経路は相模国から筑波、そして甲斐国から信濃国を経て尾張国へと戻ったとされていることから、北関東と信州よりも北は大和朝廷にとってはまだ平定されていない蝦夷の地として、日本国の境界外と見られていたことになる。また『日本書紀』では、景行天皇による熊襲討伐と熊襲の再反乱へと記述が続くことからして、熊襲の地は大和朝廷の統治下に入っていないと認識されていたことが分かる。ただし『古事記』の日向神話では、邇邇芸命から始まる天孫族の物語は熊襲の勢力が及んでいない南九州を舞台としており、そこは大和朝廷にとって重要な版図として認識されていた。このような記紀における版図認識は、当時の大和朝廷による国内的な諸氏族の統合と対外的な日本国の境界づけを示すもので、逆に列島の大八島国の版図を越えて海外に拡張する意図を含んでいなかった。

近代日本における国家神道

記紀神話は大和朝廷が仏教以前の古神道の伝承を文書化したもので、記紀には仏教を排除する意図はなく、この時期の「神道」⁽³⁾は仏教と並存するものであった。大和朝廷において神道は、天皇の祭祀と結び付いた祭政一致の段階にあったとはいえ、国家の一元的な統制下にあったわけではない。その後も大和朝廷は神道と仏教の並存を認めて、神仏習合の時代は基本的に近世まで続いた。

神道が国家と結び付いて「国家神道」⁽⁵⁴⁾となるのは、明治時代になってからである。その背景には、明治政府が神道を天皇尊崇と結び付け、国家と一体化して位置づけた歴史的経緯がある。こうして明治政府は、神道だけを国家によって特別に保護するという政策をとった。明治政府はそれまでの神仏習合の長い伝統を神仏分離令（一八六八年・明治元年）によって解体し、全国的にも激しい廃仏毀釈の運動が吹き荒れることにもなった。そして明治政府は明治四年の太政官布告により、天照大神を祀る伊勢神宮を神社の頂点に位置づけ、全国の神社を制度的にも序列化して国家体制のうちに組み込むことになる。こうして日本は近代的な祭政分離の原理とは裏腹に、国家神道による天皇制国家の道を歩み始めることになるのである。

国家神道の確立によって伝統的な皇室祭祀が国家のうちに組み込まれ、祭祀を司る天皇を国家の元首と明文化した祭政一致が実現することになる。明治憲法すなわち「大日本帝国憲法」（一八八九年・明治三十二年二月一日公布）「第一章 天皇」の第一条で、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」というように、万世一系の天皇による「統治」が定められた。この統治は、憲法発布の明治天皇による告文こうもんに謳われた「皇祖祖宗」からつながら「万世一系」の天皇によって正統化されている。そして「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」（第三条）というように、天皇が神聖にして絶対不可侵であると規定される。さらに「天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ」（第四条）というように、祭祀を司る天皇が国家元首とされることによって、大日本帝国が祭政一致の国家体制であることが示されるのである。このような祭政一致の国家体制は、近代国家の基本的原理である祭政分離に背馳する前近代的なものである。

しかも第二条で天皇の皇位継承は「皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス」というように男子

に限定されている。これは、大日本帝国憲法と併行して策定された「皇室典範」の「第一章 皇位継承」第一条「大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ繼承ス」と連動している。この「皇統」すなわち天皇氏族の「男系ノ男子」という皇位継承についての規定は、もちろんそれまでには存在していなかった。皇位継承が男子に限定されていなかったことは、古代日本における推古天皇や持統・元明・元正の三代にわたる女性天皇など、実質的な力を持った女帝に見ることができ、こうして大日本帝国憲法と皇室典範において初めて、男系の男子による皇位継承が規定されることになったのである。

また「万世一系」という規定は、天皇の途切れることのない、しかも男系の血統（「皇統」）の連続性を表現するものである。しかしこの血統の連続性そのものが、例えば継体天皇の皇位継承に見られるように疑わしいものである。⁽⁵⁵⁾ また「万世一系」という表現は記紀に見られるのではなく、男子天皇を絶対化する明治期の国家政策によるものである。このようなまさに前近代的な「大日本帝国憲法」の天皇条項は、その後の「教育勅語」の考へへとつながる基本線になるのである。

憲法制定に続いて、国民意識の統合は教育による上からの刷り込みによっても行われた。その中心をなしたのが大日本帝国憲法の翌年に発布された「教育勅語」である。それは、「皇祖祖宗」が国を始めたことから説き起こして、「朕」（天皇）の下で「我ガ臣民」（国民）が「忠」と「孝」で「億兆心ヲ一ニ」することが「我ガ國體ノ精華」であるとされる。ここでは「孝」という親子関係の徳目が、「忠」という天皇への服従の徳目に重ね合わされている。「教育勅語」の主体である天皇への「忠」は、大日本帝国憲法における「国家元首」への「忠」として、「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」というように大日本帝国への服従へとすり替えられている。このよう

に「教育勅語」は、臣民の「億兆心」の一体感情をもって「公」としての国家のために個人を犠牲にすることを謳うのである。しかもその一体性の感情には、それに抵抗する個人を「非国民」として排斥する差別感情が付随したのである。

明治期の「国家神道」は、昭和の時代に入って大日本帝国による本格的な海外侵略と結び付くことになる。大日本帝国は日本神話を利用して、日本民族としての「国民精神」を喚起し、海外への侵略を拡大してゆく。こうした大日本帝国による海外侵略のバックボーンになったのが、「八紘一字」というスローガンである。この「八紘一字」の元にされたのが、神武天皇が橿原に都を開いて「掩八紘而為宇」（八紘を掩って宇となす）と述べた『日本書紀』の文言である。ここでの「八紘」の範囲はあくまでも列島の大八島国^{おおやしまのくに}で、その国々を「宇」すなわち家のようになすという意味であって、当時の日本の版図^{やまと}を超えるものではない。しかし大日本帝国政府は、日中戦争を全面的に拡大していく状況下で「国民精神総動員実施要項」を閣議決定（昭和十二年）し、それに基づいて作成された文部省のパンフレットに「八紘一字の精神」が織り込まれた。さらに「基本国策要綱」（昭和十五年）において、「八紘一字」が「大東亜ノ新秩序ヲ建設スル」ことと結び付けられ、そのことによって「大東亜共栄圏」を満州、中国から東南アジア、さらに南太平洋諸島にまで拡張することが正当化されたのである。

こうした「大東亜共栄圏」の拡張に利用されたのが、記紀神話の天照大神である。大日本帝国によるアジア太平洋地域の植民地支配の象徴として建立された「海外神社」は、天照大神を祭神とするなど日本神話を利用したものであった。中国、満州、朝鮮、樺太さらには東南アジア、南洋諸島に至るまで設置された海外神社⁽⁵⁶⁾のほとんどが、天照大神を主祭神としていた。しかし天照大神はもともと日本神話^{やまと}に固有の、稲の豊穡をもたらす太陽神

である。また天照大神はそもそも好戦的な神ではなく、出雲国を献上されたのも大国主神による国譲りによるもので、暴力的な侵略や奪取によるものではない。このような天照大神が海外侵略のために利用されたのは、皮肉としか言いようがない。

確かに天照大神を主神とする日本神話は、太平洋戦争において国民を精神的に動員するために利用された。それではなぜ戦前の日本国家は、日本神話によって国民意識を統合しえたのであろうか。それは、国家政策としての「皇国」史観によるであろう。皇国史観は天皇の「万世一系」という一元性の共同幻想によって成り立っている。その一元性は、天照大神を祖神とする天皇氏族の血統によって保証され、この血統の継続性こそが「万世一系」の共同幻想⁽³⁷⁾を成り立たせている。そしてその共同幻想は、天皇家の「万世一系」という観念によってだけでなく、日本国民（「臣民」）が父としての天皇の「赤子^{せきし}」であるという、擬制的な家族意識によって支えられているのである。

しかし記紀神話の中では、これまで見てきたように、天皇氏族の一元的な系譜よりも、むしろ天皇氏族の系譜に含まれる血縁的な多元性が物語られている。天皇氏族ももとは、多くの氏族の中の一つの氏族であるにすぎない。日本神話が共同性を持ちえたのは、天皇氏族の祖神としての天照大神の系譜だけではなく、さまざまな神々を祖神とする多様な氏族の系譜が織り込まれているからである。諸個人は家族を通してそれぞれの血縁集団としての氏族につながっているのであって、「万世一系」の天皇氏族につながっているわけではない。天皇の「万世一系」という観念は、記紀神話における諸氏族の血縁的な多元性を消去して一元化したところに成り立つ。こうして「万世一系」の共同幻想は、天皇氏族の形成過程における多元的構造と明らかに背馳し、その構造を隠

蔽するものである。

ところで大日本帝国政府は、対外的には「八紘一字」をスローガンに海外侵略を進める一方、一九四〇年（昭和十五年）が「神武天皇即位紀元二六〇〇年」に当たるとして、全国で記念式典を大々的に開催した。それと並行して、明治天皇によって創建された橿原神宮と神武天皇陵を整備する事業が進められ、神武天皇の神格化がいつそう強められた。そうした中で、同年の二月一二日に津田左右吉の『神代史の研究』が発禁となるなど思想統制が強まり、また十月には「大政翼賛会」が発会するなど、戦時の翼賛体制へと移行してゆくのである。

「神武天皇即位紀元二六〇〇年」に先立って、そもそも神武天皇の即位をもって「紀元」が定められたのは、明治政府による明治五年のことである。『日本書紀』には即位の日を「辛酉しんゆうの年の春正月の庚辰朔（二月一日）」とあり、明治政府はこの旧暦の一月一日を新暦（太陽暦）の一月二十九日に置き換える太政官布告（明治五年）を発して「紀元」とした。そして翌明治六年一月二十九日には即位日を記念して神武天皇御陵遙拝式が行われ、この日を「紀元節」とした。しかし一月二十九日は孝明天皇の命日（一月三〇日）と前後するために、紀元節を二月一日に定め直すことになったが、その根拠は不明確である。また明治政府は公文書で明治六年を「神武紀元二五三三年」とし、それを西暦に換算して、『日本書紀』における神武天皇即位の「辛酉の年」を紀元前六六〇年とした。しかし神武天皇即位を紀元前六六〇年とすることの根拠は薄弱である。この紀元前六六〇年は、現在の考古学的知見によれば、縄文時代晩期からようやく弥生時代初期に入ろうとしていた時期で、天照大神神話の背景をなす水田稲作文化はまだ拡がっていないし、ましてや神武東遷で重要な役割を果たす鉄剣もまだ列島に入ってきてはいない。この時期は、ヤマト王権の形成期に当たる古墳時代初期にもまだほど遠いのである。

ところで「国民精神総動員実施要項」の閣議決定と前後して、「国体」概念を中心に据えて国家神道を理論化したのが、当時の知識人を動員して文部省が編纂した『国体の本義』（一九三七年・昭和十二年刊行）⁽³⁸⁾である。この大部な『国体の本義』は、すでに明治期に作成された「教育勅語」の内容を踏まえて、欧米の近代思想を批判しつつ日本固有の「国体」を理論的に打ち出したものである。

それによると（以下、引用文は現代表記に改め）、近代日本は「極端な欧化」によって、「社会主義・無政府主義・共産主義等」が侵入してきたが、それらは「西洋近代思想の根底をなす個人主義に基づくもの」である。その「個人主義の行き詰まり」によって、欧米のみならず日本もまた「思想上・社会上の混乱」に陥っており、そこで「真に我が国独自の立場に還り、万古不易の国体を闡明」⁽³⁹⁾するとして、日本固有の「国体」を提示するのである（五〇七頁）。その「国体」は、「大日本帝国」が「万世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治」することにありとされ、天皇を頂点にした「一大家族国家」として「臣民」が「億兆一心」となって「忠孝の美德を発揮する」ことこそ、「国体の精華」であるとされている（九頁）。

これに続けて記紀神話が持ち出され、「皇祖天照大神」が「豊葦原の瑞穂国」へ「皇孫」を「降臨」させたことによって、天照大神が皇孫に授けた「三種の神器」とりわけ「御鏡」を「歴代天皇は受け継ぎ」（一四頁）祀っているという。その継承によって、天照大神の子孫としての天皇の「皇位」は「万世一系の天皇の御位」であることが確証され、天皇は「絶対に動くことがない」「外国に類例を見ない尊厳」（一九頁）を持った「現人神」⁽⁴⁰⁾として絶対化される。このような「万世一系の天皇」を頂点にした「国体」概念によって、記紀神話の中で語られた天皇氏族に内包される多元的な要素は完全に消去され、「万古不易の国体」の一元的な国家体制が打ち出さ

れるのである。

「天皇と臣民との関係」は、西洋諸国における「君主に対立する人民」などとは違って、「一つの根源から生まれ」「一体となつて榮えてきた」(二三三頁)のであり、そこに「世界無比の我が国体がある」とされる。「天皇」は皇祖としての天照大神の子孫であり、「臣民」はその天皇の「赤子^{せきし}」とされる。そのことによって、「天皇と臣民との関係」が「情は父子である」(三六頁)というように、「父子」の血縁関係に擬せられている。このことは、国民を天皇の「赤子」とすることによつて擬制的な家族のつながりの中に一体化し、その一体感情をもつて国民が国家に服従することを企図するものである。そこで臣民としての「忠の道」は、「我を捨てて私を去り、ひたすら天皇に奉仕すること」(三四頁)にあるというわけである。こうして「個人」は元来「常に国家に帰一するをその本質とし」、そこに「没我の心」をもつて「国家に奉仕する」と繰り返し言われる(九七―八頁)。ここには個人を家族という血縁関係に擬せられた国家、すなわち「一大家族国家」という觀念のうちにからめとる策略が露呈しているとともに、個人を国家に帰一させて一元的に支配する、天皇制国家の全体主義が示されている。

西洋の「個人主義」を批判の標的にして天皇制国家に固有の「国体」を称揚する、『国体の本義』における「個人」対「国体」の図式は、近代西洋思想についての浅薄な理解をさらけ出すものである。というのも、近代西洋思想の個人主義はたんなる個人に還元されるものではなく、個人と個人の相互承認という市民社会の原理を内包するものでもあるからである。⁽⁶⁰⁾個人を「没我の心」によつて国家に帰一させる「国体」が、結局のところ全体主義に行き着いて自己崩壊に至ったことは、歴史の証明するところである。そこには明治期以降の近代日本における個人主義の未成熟、すなわち他者との相互関係における個人の自立性の欠如があったと言わなければなら

ない。それは自立した諸個人の相互承認によって成り立つ市民社会の未成熟とも言えよう。こうして明治期以来、個人は父権的な家族という血縁関係に拘束され、その血縁関係を背負ったままに、天皇を絶対的な父であるかのように崇敬する「大家族国家」の共同幻想へとそのまま吸収されてしまった。個人は国家に抵抗する自立的意思も剝奪され、天皇を頂点とする「国体」との一体性の感情に染まってしまったのである。

まとめ

以上、日本神話について主に『古事記』をテキストにして、多元的構造という視点から考察し、そして明治期から第二次世界大戦に至る国家神道によって、本来の日本神話の多元性がいかに換骨奪胎されたかを見てきた。ここで日本神話の多元的構造について改めて三つの側面からまとめるとともに、それが国家神道によってどのようにねじ曲げられたかを、それぞれの側面に即して見てみたい。

その第一は、神話空間の多元的構造という側面である。神話空間は、天上界の高天原のもとに地上界の葦原中国が広がり、そしてその地下に黄泉国が存在するという垂直軸の三重構造をなしている。そして地上界の葦原中国には、出雲と日向を両軸にしながら、さらにその周辺の地域から海にまで広がるという、空間の多元的構造が見られる。この地上界の葦原中国は大八島国として、列島とその周辺海域の島々に限定されている。神武天皇が「宇」(家)とした「八紘」もまた、大八島国の範囲を超えて出るものではない。しかし大日本帝国政府が『日本書紀』の文言から採った「八紘一宇」のスローガンは、その範囲を満州、中国、東南アジア、さらには南洋諸島に

まで拡大し、「大東亜の新秩序」「大東亜共栄圏」と結び付けて海外への侵略を正当化したのである。

第二は、神話空間の多元的構造と結び付いた時間系列の側面である。すなわち高天原から神々が地上の葦原中国に降り立ち、その葦原中国を舞台にして出雲神話から日向神話へと、物語が時系列に従って連続してゆく。すなわち出雲から日向への空間移動が、そのまま出雲神話から日向神話へという時系列的配置になっている。その時系列からして、天孫族が日向に降臨するに先立って、出雲族が葦原中国に強大な国を作っていたことが認められているわけである。そのことは、とりわけ『古事記』における出雲神話のドラマティックな展開からも知ることができる。しかし日本神話を取り込んだ『国体の本義』では、出雲神話についてはほとんど触れられることがなく、天照大神に国譲りをした大国主神の「恭順」と天照大神の「御仁愛」だけが強調される(二九頁)。こうして天照大神(皇祖)の「皇孫」が日向に降臨してから、神武天皇が都を大和に定めるまでの天孫族の物語が時系列に従って一元的に論じられるのである。

そして第三は、天孫族の系譜に見られる血統の多元性の側面である。天照大神を祖神とする天孫族が神話物語の主軸をなすとはいえ、天孫族は地上の葦原中国において血統を純粹に保持したのではなく、天照大神とは異なる氏神を祖神とする有力氏族との血縁関係が加わって、その血統の多元性が織りなされてゆく。こうした天孫族の血統に内在化した血縁関係の多元性こそが、むしろ記紀神話の共同性を保証したのである。天孫族の神武天皇も、国つ神の山津見神と綿津見神の血筋を引くことが、むしろその強みになっている。そして畿内三輪に形成された初期ヤマト王権もまた、天皇氏族と出雲族の系譜との血縁的な連合関係によって成り立ち、さらに有力氏族の多元的な要素を取り込んで拡大してゆくのである。しかし『国体の本義』においては、記紀に見られるような

多元的な氏神と有力氏族の系譜についての伝承が採り上げられることはない。むしろ多元的な氏族ルーツを持つ国民が「億兆臣民」として一絡げにされ、天皇はその臣民を「皇祖皇宗の臣民の子孫」とするということのように、すべてが天皇を頂点とした「一大家族国家」の一元的な血縁関係に還元されるのである。

最後に日本神話やまとが本来有する特徴をまとめて締めくくりとしたい。記紀神話は大和朝廷の編纂意図によって、確かに天孫族の出自と成り立ちを正当化するものではある。しかし記紀神話は、天孫族が有力氏族との多元的な血縁関係を織り込むことによってこそ、その共同性を獲得しえた。したがってその共同性は、天孫族の血統の一元性によってではなく、むしろ多元性の要素を内包することによって成り立っているということである。それに対して、明治期から第二次世界大戦に至る国家神道によって、日本神話が本来持っていた多元性の構造がいかに換骨奪胎され、またねじ曲げられたか、以上の考察から明らかになったであろう。こうして記紀神話とりわけ『古事記』の多元的構造によって、日本近代における国家神道と天皇を頂点とした一元的な全体主義は論駁されるのである。

注

- (1) 「日向」は記紀の時代には、現在の宮崎県だけではなく南九州一帯を包括する地域名であった。
- (2) この名には、天つ神の日の神、すなわち天照大神の子孫であるとともに、稲穂をにぎにぎしく実らせる豊穰の神として、水穂国との結び付きが示されている。
- (3) 『日本書紀』によると、垂仁天皇の皇女・倭姫命やまとのめが天照大神の鎮座する地を求めて伊勢国に至り、天照大神がそこを「美しい国」として降

り立ったことから、倭姫命は五十鈴川の傍に斎宮を建てたとされる。

- (4) 中臣鎌足は大化の改新の功績により天智天皇から藤原氏を賜り、その鎌足の子である藤原不比等は和朝廷において大宝律令の制定や『日本書紀』の編纂にも参画することになる。

- (5) 天宇受売命は、降臨した邇邇芸命を出迎えた猿田毘古神を伊勢国に送り届けた縁で、猿女君と呼ばれることになったという。

- (6) 記紀には「三種の神器」という言葉はなく、この言葉が定着したのは南北朝時代とされる（水野祐『日本神話を見直す』学生社、一九九六年、二三七頁を参照）。また明治期の「皇室典範」で、天皇が崩御した時に「皇嗣」が「祖宗ノ神器」すなわち「鏡・剣・璽三種ノ神器」を継承すると規定されている。

- (7) 勾玉の形が何を表しているかについては諸説あるが、胎児の形を表すという説からすると、そこには根源的な人間生命の呪術的力が信じられていたと見ることができると。

- (8) 弥生時代後期の平原遺跡から発掘された複数枚の大型内行花文鏡は、三種の神器の一つとされる八尺の鏡と同形とする説がある。原田大六『実在した神話』学生社、昭和四一年、一六四頁以下を参照。

- (9) 倭国の外交拠点であった伊都国の三雲南小路遺跡墳丘墓（弥生時代の王墓）からは、銅剣、勾玉、そして多くの銅鏡（前漢鏡）がまとまって出土している。この考古学的事実から、天孫族の出自が北部九州にあるとする推測することができる。

- (10) 八尺の鏡は、後に垂仁天皇の皇女・倭比売命が伊勢神宮に天照大神を祀ったことにより、伊勢神宮に奉納されることになったとされる。

- (11) この岬は現在の鹿児島県南さつま市笠沙町に属する薩摩半島の野間岬に比定される。

- (12) 木花之佐久夜毘売はもともと桜島火山の祭神とされるが、その後は火山の代表とも言うべき富士山を神格化した浅間大神とも同一視されて、富士山本宮浅間大社を総本宮として全国の浅間神社の祭神として祀られている。

- (13) 綿津見神は、伊邪那岐命が黄泉国から戻って「筑紫の日向」の瀬の水で禊をしたときに成ったとされる、海を司る国つ神である。

- (14) ここでワニとされているのは爬虫類の鰐ではなく、海のサメであると考えられる。山陰地方沿岸ではサメをワニと呼ぶ風習が現在でも遺っている。『古事記』のこの箇所原文ではワニが「和邇」と表記されており、海神族の一派である和邇氏が示唆されている。

- (15) 鵜葺草葺不合命を主祭神として祀っているのが鵜戸神宮（宮崎県日南市）で、その本殿の建つ岩窟で豊玉毘売は子供を産んだと伝えられる。
- (16) 宝賀寿男『和珥氏 古代氏族の研究』青垣出版、二〇一二年を参照。
- (17) 澤田洋太郎『ヤマト国家成立の秘密』新泉社、一九九四年、一〇九頁を参照。
- (18) 柳本古墳群の北に隣接する和邇古墳群の中でも、東大寺山古墳は四世紀半ば頃の和邇氏の首長の前方後円墳と想定されている。その副葬品の中の金象嵌大刀は二世紀後半に後漢で制作されたと推定され、和邇氏による早期からの中国との関係を垣間見ることができるとされている。
- (19) 津田左右吉は神武天皇の「東遷は歴史的事実ではない」とし、大和朝廷は「はじめからヤマトに存在した」（『古事記及び日本書紀の研究 新書版』毎日ワンス、二〇一八年、二五六頁）としているが、天孫族の出自が筑紫（九州）にあったという説は現在でも根強くあり、神武東遷が完全なフィクションであると断じることができない。
- (20) 饒速日命が「天磐船」に乗って大和に入ったという物語には、北部九州の沿岸域を拠点とし、造船と航海にも長けていた物部氏の出自が暗示されている。
- (21) この高千穂を天孫降臨の地とする説については、梅原猛『天皇家のふるさと』日向をゆく』新潮文庫、平成一七年、七九頁以下を参照。
- (22) 『日本書紀』では宇佐津彦で、宇佐の国造の祖とされる。
- (23) 岡田宮は北部九州の要衝の地であった遠賀川河口の近くに想定され、そこに建つ岡田神社（北九州市八幡西区岡田町）は神武天皇を主祭神とする。
- (24) 『日本書紀』では高島宮の滞在期間は三年とされている。高島宮の位置は現在の岡山市南区宮浦（児島湾沿岸）に比定される。吉備国の最大豪族である吉備氏は、後にヤマト王権を支える氏族になる。
- (25) 『日本書紀』では「長髓彦」で、天皇軍が白肩津から生駒山を越えて内に入ろうとしたところで戦いになったとされる。長髓彦は天皇軍が「我が国を奪おうとする」と言っていることから、生駒山麓一帯を根拠地にする先住勢力であると考えられる。
- (26) 「水門」は紀ノ川の河口付近に位置すると想定され、水門吹上神社境内に神武天皇聖跡男水門顕彰碑が立つ。
- (27) 雷と剣を司る天つ神で、鹿島神宮に主祭神として祀られている。

- (28) この大刀は物部氏ゆかりの石上神宮に祀られ、物部氏にとって最高の神器とされる。
- (29) 太陽に棲むとされる神話上の三足鳥として古代中国や高句麗で信仰され、高句麗の古墳壁画にも描かれている。その伝承が大和朝廷にも受容されたものと考えられる。『日本書紀』では八咫鳥の子孫が葛野主殿県主（後の鴨県主）とされており、天皇の側近として輿車の職掌にあった。上田正昭『日本神話』角川ソフィア文庫、二〇一〇年、一五一頁を参照。
- (30) 吉野川の支流の丹生川が辰砂の産地であり、そのことが神武東遷の物語に登場する吉野の国つ神と関係していることについては、安本美典『大和朝廷の起源』勉誠出版、二〇〇五年、一九五―二〇二頁を参照。
- (31) 橿原の辺りは、大和朝廷では大伴氏の領地として認識されていた。坂靖『ヤマト王権の古代学』新泉社、二〇二〇年、二一五頁を参照。
- (32) 大伴吹負の功績については『日本書紀』の天武天皇条に記載されている。
- (33) 宝賀寿男『神武東征』の原像（青垣出版、二〇〇六年）は、「物部氏族が淵源を北九州にもったとする見解」（二六一頁）に基づいて、北九州から近畿地方に「東遷」してきたと想定している。また谷川健一『隠された物部王国「日本（ひのもと）」』（情報センター出版局、二〇〇八年）は、物部氏が「邪馬台国」と出身地を同じくする筑紫平野から、「邪馬台国の東征に先立って」（八二頁）東へ移って、「河内・大和地方に一つの国を建てた」（一六〇頁）としている。澤田洋太郎『伽耶は日本のルーツ』（新泉社、二〇〇六年）も、北部九州の遠賀川下流域を根拠地にしていた物部氏が、「瀬戸内海を東進して」「河内に上陸」（一五六頁）したとしている。
- (34) 物部宗家は丁未（ていみ）の変（五八七年）によって没落するも、同じく饒速日命を祖神とする石上氏（いのかみ）が天武朝下で物部氏改め本宗家となり、大和朝廷の軍事的実権を維持してゆくことになる。石上氏の祭祀する石上神宮には物部氏に由来する布都御魂が祀られており、物部氏の系譜を留めている。物部氏と石上神宮との関係については、日野宏『物部氏の拠点集落 布留遺跡』新泉社、二〇一九年、八頁以下を参照。
- (35) 大久米命の語ったところによると、勢夜陀多良比売に見惚れた大物主神は、比売が大便をする時に矢に姿を変えて陰部を突き、それに驚いた比売が矢を取って床においたところ若い男に変身して、比売と結婚したという。
- (36) 神武天皇陵は現在でこそ整備されているものの、そこにもっとも神武天皇陵が確認されていたわけではない。むしろ畝傍山周辺では縄文時代晩期の「橿原遺跡」が発掘されていることから、橿原は水田地帯ではなく樹林地帯であったと想定される。森浩一『天皇陵古墳への招

待』筑摩選書、二〇一一年、二五六頁を参照。

(37) 「倭国」の位置については、畿内ヤマトを中心とする説もあるが、北部九州の伊都国（現・糸島半島周辺）が中国からの使節との外交拠点になっていたことから、邪馬台国も含めて北部九州とせいぜいその周辺の諸国が想定される。

(38) 倭国と魏との交流拠点をなした伊都国の痕跡は平原遺跡に見ることができ、そこから大型内行花文鏡を含む中国製の銅鏡が出土している。また筑後川流域に位置する平塚川添遺跡は北部九州で最大規模の複合的環濠集落として、吉野ケ里遺跡と併せて邪馬台国の可能性が考えられる。

(39) 現在の熊本県阿蘇地域を支配していた熊襲の国で、弥生時代後期から鉄器生産の中心地域として邪馬台国に対峙していたと考えられる。その後も熊襲は大和朝廷に抵抗を続けることになる。

(40) 『日本書紀』の神功皇后の条に、「魏志倭人伝」の伝えるところとして「倭の女王」が「洛陽の天子」に使いを遣わしたとの記述がある。

(41) 中国における倭国の情報は、『晋書』『倭人伝』における「倭の女王」（台乎）からの朝貢（二六六年）についての記事の後、五世紀初めの倭の五王・讃の朝貢が記録されるまで欠落している。

(42) 「ヤマト」の地名は、ヤマト王権が形成される前に奈良盆地にあったわけではなく、「ヤマト」の呼称が中国側からの「倭」の表記を経て、後に大和朝廷による「日本」や「大和」の表記に変化したと考えられる。

(43) 宝賀寿男『三輪氏』青垣出版、二〇一五年、一八六頁を参照。

(44) 『古事記』では、崇神天皇が夢で大物主神のお告げを聞き、意富多々泥古（日本書紀では大田田根子）によって三輪山に大物主神を祀ったところ疫病の祟りが収まったとされる。その意富多々泥古は、大物主神と活玉依毘売の子の子孫とされる。

(45) 纏向遺跡は弥生時代末期から古墳時代前期にかけての遺跡で、そこからは、東は尾張や伊勢からの、西は吉備や出雲、さらにわずかながらも北部九州からの土器が出土しており、纏向は列島各地から人々の集まる交易拠点でもあったことが分かる。

(46) 宝賀寿男、前掲書一八七頁を参照。

(47) 箸墓古墳を卑弥呼の墓に比定する論があるが、卑弥呼の死が三世紀半ばで時代的にずれることから、この論には与しない。

- (48) 『日本書紀』崇神天皇条の箸墓伝説は次のような物語である。大物主神の妻の倭迹迹日百襲姫命は、夜しか来ない夫に姿を見たいと言ったところ、朝に櫛笥の中を見えるように言われ、櫛笥の中に子蛇の姿を発見して驚いた。それを恥じた大物主神は三輪山に帰ってしまい、百襲姫命がそれを悔いて座り込んだところ、陰部を箸で突いて死んでしまったという。これが箸墓古墳の名前の由来である。
- (49) 崇神天皇の陵は、三輪山北西山麓の柳本古墳群に属する行燈山古墳が宮内庁によって治定されている。
- (50) この国書の作成責任者は推古天皇の摂政・聖德太子と想定される。
- (51) 「日本」の国号採用の経緯については、吉村武彦『古代天皇の誕生』角川文庫、令和元年、二八六頁を参照。なお「大和」は、ヤマト王権が統治した畿内の律令国の名称であったものが、後に「日本」国の別名として使われることになったものである。
- (52) 福永光司『道教と古代日本』人文書院、一九八七年、一一五頁を参照。
- (53) 「神道」という用語が最初に使われたのは『日本書紀』の用明紀で、「天皇、仏法を信じて神道を尊ぶ」とある。これに対して、近世日本で古神道の復活を唱えた、本居宣長の門人の平田篤胤は、仏教を排撃する意図を示している。
- (54) 「国家神道」の歴史的考察については、島園進『国家神道と日本人』岩波新書、二〇一〇年を参照。
- (55) 武烈天皇が五〇六年に嗣子のないまま崩御したために、越前国を治めていた男大迹王が大伴金村らによって応神天皇の五世孫として後継の天皇に擁立され、継体天皇として即位したとされる。しかし男大迹王が天皇氏族と直接的な血縁関係にあった確証はなく、皇位継承ではなく越前国の豪族による皇位の篡奪という説もある。
- (56) 神奈川大学二一世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第3班課題3「海外神社跡地調査」データベースを参照。
- (57) 津田左右吉は戦前に記紀神話のフィクション性を指摘したものの、戦後になって「万世一系」について、「日本民族が一つの民族であるという事実」から「皇室は永久であるべきものであるという考え」が固められ、「皇室は国民とともに永久であり…その国民とともに万世一系なのである」と論じている。（『建国の事情と万世一系の思想』『古事記及び日本書紀の研究 新書版』毎日ワンス、二〇一八年所収）
- (58) 本書の発案と起草をしたのは、文部省思想局の伊東延吉と国民精神文化研究所助手の志田延義であり、帝国大学を中心とした哲学研究者な

ど多くの学者も起草に協力している。

(59) ここで「天皇と臣民の関係」が「父子」の情にあるとされているが、天皇のために生命を捧げるべく飛び立った特攻隊員の最期の想いが、圧倒的に母親への思慕の情であったことは、皮肉としか言いようがない。

(60) 近代ドイツの哲学者ヘーゲルはドイツ後期ロマン主義の「家族国家」論に対して、血縁関係の「家族」から「国家」を区別し、その間に相互承認を原理とする「市民社会」を介在させて、社会全体を「家族―市民社会―国家」という重層的構造において理解している。